

大手前大学学習支援センターの総括（2007 年度～2012 年度）

A Summary of Learning Support Centre at Otemae University (2007~2012)

石毛 弓*1

CELL教育研究所研究員、学習支援センターコーディネーター*1

大手前大学の学習支援センターは 2008 年度に設置された。4 年が過ぎた現在、今後の同センターのあり方を検討するうえで、これまでの活動を総括することは重要である。また、2012 年度には学習支援センターの運営体制に大きな変化があった。この点からも、2011 年度までの取り組みと比較してどの部分が変わったのかを記録しておくことは必要だと考えられる。以上の目的から、本稿では学習支援センター設立の経緯とその変遷について、主として初年次教育との関連から解説を行う。

キーワード：学習支援，学習支援センター，チューター，ピアサポーター

1. はじめに

学士課程の学生の質を保証するために、高等教育機関では現在さまざまな改革や見直しが行われている。たとえば単位の実質化においては、大学設置基準第21条にあるように、1単位科目は45時間の学修内容を標準にするという原則に則った学習時間の担保が求められている。これは当然ながら単に学習時間が保証されていればいいというものではないため、学習成果の可視化など、学生が身につけた力を客観的に測定する体制づくりなどが推奨されている。日本の高等教育におけるこのような要請は、授業内での学習だけで対応しきれないものではない。したがって、授業時間外学習とその支援体制が重要であると考えられる（中央教育審議会 2008 a）。

大手前大学（以下、本学とする）では、授業外学習の重要性を理解し、その推進の一環として2008年度に学生の自主学習をサポートする学習支援センターを設けた。もちろん、本学における学習支援は同センターの活動に限ったものではなく、全学的に取り組まれているものである。したがって本稿は、それら多岐にわたる取り組みのひとつとして位置づけられるものである。以下では、これまでの4年間にわたる学習支援センターの概要を報告する。また同センターでは従来のやり方を改正し、2012年度から新たな運営体制を導入した。その活動内容もあわせて紹介する。

2. 学習支援センター設置の経緯

本章では、本学の学習支援センターが設立されるに至った経緯を説明する。同センターの設立には初年次教育の実施が大きく関わっているため、まずそちらについて簡単に解説する。

2.1. 初年次教育との関わり

本学において、学部ごとの初年次教育は従来から行われていた。しかし2005年度からの大学改革にともなって、総合文化学部・メディア芸術学部・現代社会学部の全三学部で共通した初年次必修科目が2007年度から開講された。その概要は表1～表4のとおりである。この初年次必修科目は、全クラスが統一カリキュラムで運営されているのが特徴である。また学生が学習習慣を身につけることを目標のひとつに掲げ、ほぼ毎回授業外課題を課している（奥田ほか 2010）。

表 1 初年次必修科目の変遷

年度	2007~2010	2011~2012
科目名	フレッシュマンセミナー I、II 英語表現 I、II 日本語表現 I、II 情報活用 I、II	キャリアデザイン I、II 英語 I、II 情報活用 I、II
単位数	春学期 2 単位 秋学期 2 単位 ※フレッシュマンセミナーは春学期 1 単位、秋学期 1 単位	春学期 2 単位 秋学期 2 単位

表2 科目の概要 (2007年度～2010年度の標準値)

科目名	フレッシュマン セミナー	英語表現	日本語 表現	情報活用
1 クラスの 人数	20～25 名規模	20 名規 模	20～25 名規模	30～50 名規模
クラス数	30～48	48	30～48	16～24

表3 科目の概要 (2011年度～2012年度の標準値)

科目名	キャリアデザイン	英語	情報活用
1 クラスの 人数	25 名規模	20 名規模	30～50 名規 模
クラス数	30 クラス	36 クラス	18 クラス

表4 科目の主なねらい(2011年度～2012年度の概要)

フレッシュマン セミナー	初年次生の大学生活・学習活動をグループワーク等を通じてサポートする
キャリア デザイン	PBL 型学習やプレゼンテーション等を通じた学生のキャリア育成をサポートする
英語表現・ 英語	さまざまな学習活動の定着(例: 授業外課題提出)を目標とする。2011年度からはとくにコミュニケーション能力の育成めざす
日本語 表現	初年次生に最低限必要とされる日本語能力を、「読む・書く」と「話す・聴く」に分けて通年で育成する
情報活 用	IT活用能力を育成する(Office、電子メール、インターネット、情報リテラシー等)

しかしながら2007年度には、学生が自主的に学習を行える場は図書館とPC教室に限られていた。また授業内容や課題に関する疑問・質問があっても、担当教員が非常勤講師のケースなどもあり、適切・早急に対応することが難しかった。さらに、統一カリキュラムとしての必修科目を運営してゆくためには授業支援が必要なことが切実な問題として浮かびあがっていた。

2.2. 学習支援センターの設置

2.1の状況を鑑みて、状況を改善するために2008年度からいたみ稲野キャンパス(以下、いたみCとする)に学習支援センターが設置されることとなった。その主な設置目的は下記の通りである。

学習支援センター設置目的 (2008年度4月3日案)

(抜粋)

[1]学生の学習活動の促進

必修科目を総合的に管理し、学生に対して案内やフォロ

ーをしていくことで、学生の学習活動の促進をはかる。

[2]学生の学習の質の向上と学習成果の担保

授業外学習をチューターや相談窓口で学生をサポートすることで、学習の質を向上させる。

また、授業用資料の作成や課題の一括採点やスタンプ¹⁾の運用を通して、学習成果を担っていく。

[3]学生の学習サービス満足度の向上

授業時間外の質問受付や相談窓口、携帯電話でスタンプ個数や所属クラスを確認できるシステム運用で、学習サービス満足度の向上をはかる。

[4]学生の動向把握

必修科目の出席や課題提出状況をデータベースで管理し、学習カルテを積極的に活用していくことで、学生の動向をより細やかに把握する。

[5]教員の負担の軽減

採点業務を専任のマーカー²⁾が行うことで教員の負担を軽減し、授業準備や学生のフォロー等の業務に専念してもらう。

[6]教育の質・成果の保証、下限保証、平準化

マーカーによる一括採点で採点基準を統一し、教育の平準化を行う。

2011年度までの主な学習支援センターの構成員は、同センター全体を管理・運営する各初年次必修科目コーディネーター、事務面をうけもつ学習支援センター事務職員、直接的に学生への学習支援にたずさわるチューターであった。また学生のメンタル面をケアするスクールカウンセラーとも連携を図った。なお、それぞれの役割分担については次章を参照されたい。

このように、本学の学習支援センターは設立当初は初年次必修科目のサポートという側面が強かった。そのため初年次生が通学するいたみCに設置され、2年次生以上が通学するさくら夙川キャンパス(以下、夙川Cとする)での本格的な稼働は後年に譲ることになった。上述の状況を踏まえ、次に主としていたみCにおける同センターの具体的な活動内容をみてゆく。

3. 学習支援センターの役割

本学の学習支援センターは、大きく分けて二つの機能を担っている。ひとつは学生の自主学習の支援であり、もうひとつは初年次および2年次の必修科目の授業支援である。本章ではまず自主学習支援について述べ、次に授業支援をあつかう。2年次必修科目への授業支援は、科目数が1科目であるという以外は初年次の場

合と概ね変わりががないため最後に回し、先に初年次必修科目への対応について解説する。

3.1. 学習支援センター自習スペース

自主学習支援の場所は、いたみCでは開始年度である2008年度は、最初は20名規模の教室を自習スペースとして開放し、同規模の隣の教室を授業外学習の採点業務などに使用していた。その後、利用者数の増加にともない隣の採点用教室も自習スペースとして利用するようになった。2教室を利用する体制は現在も変わらない。両教室にはチューターが常駐し、学習のサポートにあっている。

活動場所に関しては、自習スペース(図1-②)も、後に述べる事務スペース(図1-①)もW棟の2、3階の階段近くに集中しており、業務全体の連携がとりやすくなっている。また自習スペースの隣は図書館(図1-③)であり、W棟のこのエリア全体でラーニングコモンズとして機能することを想定した。

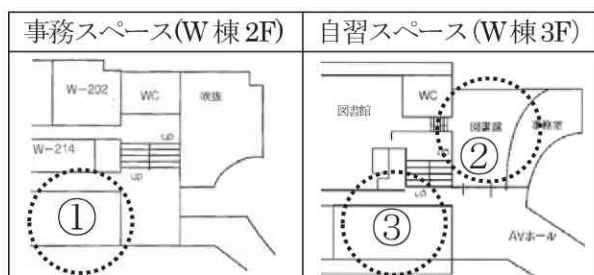


図1 いたみ稲野C学習支援センター
※①～③部分を学習支援センターとして利用、もしくは学習支援センターと連携している

開室曜日および時間等を表5に示す。2008年度から2010年度までは、曜日は月～金、時間帯は13:10～18:00であった。時間帯については、2010年度までは初年次生は1、2時限に連続して必修科目が割り当てられていたため、午前中の利用はほぼないものと考えられていた。2011年度が月・水・金となったのは、初年次必修科目の変遷により当該科目がこの3日間のいずれかに開講されたためである。なお2011年度開始当初は例年通り13:10からの開室であったが、曜日が減ったことや必ずしも1、2時限連続で必修科目が入るわけではなくなったことから、2時限目以降の利用を想定して10:45から開室することになった。2012年度は、前年度の利用状況や当該年度の利用形態を検討した結果、月～金、10:00～18:00の開室とした。

表5 いたみC学習支援センター自習スペース概要

年度	2008～2010	2011	2012
場所	W棟2Fの20名規模の教室×2		
曜日・時間	月～金 13:10～18:00	月・水・金 10:45 ～18:00	月～金 10:00 ～18:00
人員	チューター：3名		チューター： 1～4名 ピアサポーター： 1～2名/
設備	ノートPC40台 プリンタ(図書館のものを利用)		
活動	授業外課題(主に初年次必修科目)に対するサポート、授業を欠席した学生への課題配布、よろず相談など		

※チューター制度は3.2、ピアサポーター制度は4.2を参照

表5で示した「活動」は、活動内容の主なものである。「授業外課題(主に初年次必修科目)に対するサポート」の例として、論述へのアドバイスやコンピュータ・ソフトの活用方法などが挙げられる。こういった支援を行うにあたっては、学習支援センター側が学生用のテキスト等で内容を事前に把握しておくほか、各初年次必修科目のコーディネーターが担当教員に毎回電子メールで配布している授業計画や授業用資料も共有している。また、場合によっては科目コーディネーターや授業担当者から提供された情報を基に、学習支援内容を柔軟に変更している。統一された授業外課題でも、あるクラスで特別な指示があった場合、情報提供があればそのクラスでの指導方針に基づいた学習支援を行うよう努めている。さらに、キャリアデザインでは授業外課題の採点を一部のチューターが行っているため(3.2)、採点基準や出題意図を理解したうえでより適切なアドバイスが可能となっている(表8の「活動」も状況は類似したものである)。

3.2. チューター制度

学生の学習をサポートすることを目的として、学習支援センターにはチューターが常駐している。チューターは本学の非常勤講師および他大学の大学院生、オーバードクター等で構成される。1日のチューター数は、2008年度から2011年度までは3名体制をとっていた。

授業外課題を提供する初年次必修科目が「英語表現」「日本語表現」「情報活用」であり、それぞれの科目への学習サポートが必要だと考えられたからである。しかし、チューターに可能な範囲で他の科目に関する質問も積極的に受け入れ、支援する幅を広げようという試みは、設置年度から常になされていた。

上述の傾向および必修科目の内容の変更などの理由により、2012年度は特定の科目に特化するかたちでのチューター配置はしていない。現在のチューターは、アカデミック・ライティングの基礎およびWord、Excel、PowerPointなどIT活用に関する基礎的な質問に対応できることが、原則的には求められている。これらの項目は、初年次必修科目での教育内容に準じている。また、高度に専門的な内容は基本的にはサポートしていないものの、必修科目以外の学習支援も可能な範囲で行っている。

さらに年度によっては、チューターは課題等の添削指導にも携わっている。2012年度春学期でいえば、キャリアデザインⅠ（以下、CDⅠとする）および2年次必修科目であるキャリアデザインⅢ（以下、CDⅢとする）の論述課題などの添削指導を行っている。この業務は、自主学習の支援ではなく次節で述べる授業支援の部分に関わるものである。

3.3. 初年次必修科目の授業支援

本学の初年次必修科目は、大学が方針を定め、科目ごとに配置されたコーディネーターらが具体的な授業内容を設計する体制をとっている。前述のように統一カリキュラムで授業を運営するために、コーディネーターは毎回の資料や授業外課題、授業計画書等を準備している。これはコーディネーターのみで行える作業量を超えている。全初年次生が対象の科目であることから、大学全体として授業支援をするために、学習支援センターでは初年次必修科目のサポートを行っている。

この授業支援は学習支援センター事務職員の担当となっている。事務職員の業務内容は、年度によって少々異なるが、基本的には下記のことなどを行っている。

- ・授業資料の準備
例： 学生人数分の複写・仕分け
- ・授業外課題の準備・データ管理
- ・出席管理
- ・必要に応じたデータ作成
- ・その他授業運営への支援
例： ビデオ撮影補助

・チューター管理（シフト表作成および勤怠表管理、給与計算等。ただし2012年度は、後述する学習支援センターマネージャーの業務となる。）

以上が、学習支援センター業務のうち初年次必修科目の授業支援に関する作業である。

3.4. 学生支援

自主学習支援と必修科目の授業支援が、学習支援センターが直接的に行っている業務である。しかしまた同センターは、なんらかの理由で学習に困難を感じている学生を発見し、適切な対応をとる場のひとつとしても位置づけられている。

初年次必修科目では、担当教員が毎回学生の出席をとっている。そのデータ管理は学習支援センター事務職員が行い、教員および学生が参照できるかたちにしている。そのため、初年次必修科目という限定はつくものの、学生の出席情報を一元管理することができる。

初年次必修科目は3～4科目あり（表1）、初年次生の時点でこれらにほとんど出席していない学生は、他の科目も休みがちである可能性が高いと考えられる。初年次必修科目のコーディネーターらは全初年次生の出席データを目にする機会が多いため、このような欠席しがちな学生、すなわちなんらかの困難を抱えているかもしれない学生を特定しやすい立場にいる。しかし、初年次必修科目のコーディネーターが欠席が重なりがちな学生のすべてに支援を行うことは時間的に不可能である。また、そのような学生に対しては各担当教員がサポートしているものの、すべてを教員に任せることは負担が大きく、さらに学生への対応が不均等になる恐れがある。これらの点を鑑みて、本学では2009年度からスクールカウンセラー制度を導入した。

スクールカウンセラーの所属は学生課だが、デスクを学習支援センター事務室においている。学生課、初年次必修科目のコーディネーター、担当教員、学習支援センター事務職員、また別部署になる健康相談室の心理カウンセラー等と連携を取り、大学に適應することが困難な学生の対応にあたっている。たとえば、必修科目を相当数欠席している学生に電話やメールで連絡をとって状況を把握し、その情報を担当教員に伝えることなどを行っている。

このように、学習支援センターが自主学習だけでなく初年次また次に述べる2年次必修科目の授業支援、さらに学習困難な学生対応を行っている点が、本学における学習支援センターの特徴となっている。

3.5. 夙川 C における学習支援センター

本章では、これまでいたみCの学習支援センターにおける概要を述べてきた。しかしながら本学には2年次生以上が通う夙川Cもあり、そちらについてこの節で説明する。

学習支援センターは、前述のようにまずは初年次教育を支援するという目的で設置されたため、2008年度の夙川Cには存在しなかった。さて、初年次教育の重要性は、現在では高等教育機関でも文部科学省でも広く認識されている。しかし、初年次教育が大学生としてのアカデミック・スキルを育成するためのものでもあるとすれば、とくにリベラルアーツ型教育を標榜する本学において、その取り組みが初年次生だけで終わってよいものなのかという疑問が、初年次必修科目コーディネーター他の間で話し合われた。この問題意識から、初年次で学んだ成果を実践する場として、2年次生に対する必修科目が2009年度より設置された(表6、7)。この2年次生の必修科目にもまた科目コーディネーターを配置し、統一カリキュラムを実施している。その授業支援のために、2009年度から夙川Cにも学習支援センターが開設された(石毛 2010)。

表6 大手前大学の2年次必修科目

年度	2009~2011	2012
科目名	基礎演習 I、II	キャリアデザインⅢ、Ⅳ
単位数	春学期1単位 秋学期1単位	春学期2単位 秋学期2単位
1クラスの人数	約25名	約25名
クラス数	24~29クラス	26クラス

表7 各科目のねらい

基礎演習	初年次必修4科目(当時)で学んだ内容を確認し実践することをめざす(例: インタビュー、プレゼンテーション)
キャリアデザイン	初年次のキャリアデザイン授業内容を踏まえて、さらに発展した内容とする。とくにアカデミック・ライティング、プレゼンテーション、PBL型学習を推進する

夙川C学習支援センターには、2009年度にはチューターがいたが、学生の質問等に応じるものの、当該年度に行っていたLMS上の授業支援³⁾を主業務としており、いたみCのように自主学習へのアドバイスを主とするものではなかった。2010年度には上述のLMS

を使用した支援はなくなり、チューターは配置されていなかった。しかし学習支援の必要性は認識されており、2011年度に実験的に本学大学院生によるチューター⁴⁾が雇用されたのち、2012年度から自主学習へのサポートが実施された。2012年度における学習支援センターの主業務は、前述のいたみCとほぼ同様となる(表8)。

表8 夙川C 学習支援センター概要 (2012年度)

場所	CELL101 (15名規模の図書館内の小部屋)
時間	月~金/10:00~18:00
人員	チューター 1~3名/ピアサポーター 1~2名
設備	ノートPC8台 プリンタ(図書館のものを利用)
活動	授業時間外課題(主に2次必修科目)に対するサポート、授業を欠席した学生への課題配布、よろず相談など

なお夙川C学習支援センターの自習スペースは図書館内の小部屋CELL101(表8、図2-①)を利用し、いたみC同様ラーニングコモンズの一端を担うことを意識している。2012年度秋学期からは、図書館内のオープンスペース(図2-②)にもチューターがいるようにし、より学生が相談しやすい雰囲気づくりをめざしている。

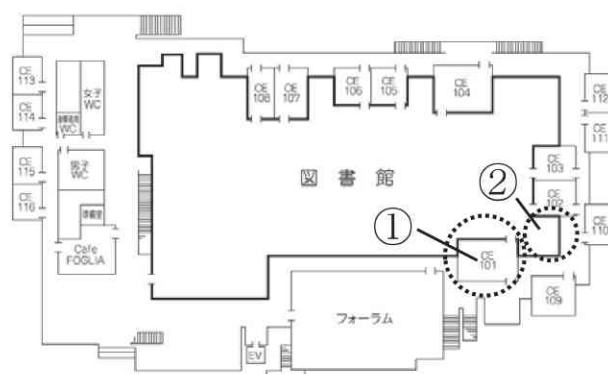


図2 さくら夙川C 学習支援センター
※①、②部分を学習支援センターとして利用

4. 2012年度の新体制

学習支援センターは、運営が始まってからこの2012年度で5年目に入る。4年目までと今年度では、同センターの運営体制が大きく変化した。その主要なものを挙げると、「責任の所在」「組織としての位置づけ」「ピ

アサポーター制度の導入」の三点になるだろう。本章ではこれらの点について解説を行う。

4.1. 責任の所在・組織としての位置づけ

これまで何度も述べたように、本学の学習支援センターは初年次必修科目と密接な関係にある。そのため、学習支援センターの運営は初年次教育に携わる者が担うのが従来のやり方だった。具体的には、各初年次必修科目のコーディネーターらが、授業および課題の内容をもっともよく把握している者として、学習支援センターを運営してきたのである。

しかしながら、学習支援センター関連の仕事は初年次必修科目コーディネーターの業務として必須なわけではなく、むしろボランティアのようなかたちで行われていた。したがって極端なことをいえば、ある年度のコーディネーターが学習支援センターの運営を放棄したとしても、その責任を問うことはできない状況にあった。そのような事態が生じたことはないものの、これは運営体制として健全なものではない。また必修科目のコーディネーターは科目運営に集中してその成果を出すのが本来業務であり、それだけでも相当な負担となる。そのうえ学習支援センターの業務を担うのは負荷がかかりすぎるという考えから、必修科目コーディネーター業務と学習支援センター運営とを切り離すべきだという話し合いがなされた。その結果、2012年度より学習支援センターの管理運営をする人員として、学習支援センターコーディネーター（以下、学習支援センターCとする）を新たに設置することとなった。

さらに、チューター制度に関して三つの点が問題視されていた。一つは、チューターの業務管理である。同センターを円滑に運営するためには、管理側がチューターと密に連絡を取り、業務状況を把握している必要がある。しかしながら、他業務との兼任である初年次必修科目コーディネーターでは、日によって違うすべてのチューターと顔を合わせて話をしたり、自習スペースの状況を把握することが困難であった。

もう一つは、チューターのトレーニングの問題である。チューターには学習支援センターで必要とされる知識を有した人間を雇用しているが、チューターとしての一般的な振る舞い方や学生への接し方など、基礎的な項目に特化して訓練を行ったことはなかった。

三つめはチューターのシフトや勤怠管理である。これらは学習支援センター事務職員が行っていたが、他の業務との兼ね合いから負担が大きいという声が出ていた。こういった点から、チューターの管理や指導に

集中してあたる人間を配置することが、業務全体をうまく循環させ、また学習支援の質を高めることになると考えられた。学習支援センターCの場合、本学の既存の教員を起用し、同センターの専従ではないためこの任には適切ではない。そのため、学習支援センターのとくに自主学习支援を担当する者として、学習支援センターマネージャー（以下、学習支援センターMとする）を職員として新たに公募し雇用した。

学習支援センターCが全体の運営についての方針を立て、関連部署との連携をとる。事務職員は主として必修科目の授業支援を、学習支援センターMは主として自主学习支援を担当する。センター長は現在のところおらず、必要に応じて教務課他に連絡や報告を行うというのが、現在の学習支援センターの運営体制である。なお図3は、自主学习支援に限った場合の同センターの運営体制略図となる。

さて、ここまで「だれが学習支援センターの運営に対して責任をもつのか」という点について述べてきた。これは学習支援センターという組織の位置づけにも関わる話である。2011年度までは学習支援センターは、学内の特定の部署に所属してはいなかった。予算に関しては教学運営室から申請していたが、正式に教学運営室の一部門として位置づけられていたわけではなく、いわば「学習支援センター」という概念の下で初年次必修科目のコーディネーターや事務職員らが働いていた。これが指示系統や責任問題の混乱を招く要因のひとつとなっていた。そのため2012年度からは、学習支援センターが教育への支援を行う部門であることから、教務課の一部門として正式に位置づけられた。

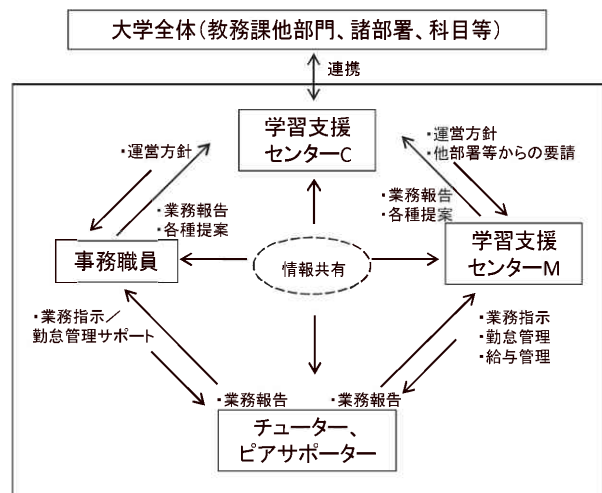


図3 学習支援センター略図 (自主学习面・2012年度)

4.2. ピアサポーター制度の導入

学習支援センターで自主学習をサポートするのは、従来はチューターのみであった。しかし本学の学生自身が学習支援に関わることは、学生にとっても大学にとっても有益であると考えられていた(コール 2002; 西山・山本 2002)。そこで2012年度に、大手前大学生自身が他の学生の学びを支えることを目的としたピアサポーター制度を導入した。知識を教える人間ではなく、おなじ学生の目線から相手の学習をサポートすることがピアサポーターの役割である。

ピアサポーターは本学のLMSで、2～4年次生を対象に公募した。応募の際には志望動機・意気込みを400字以上で書いて提出することを条件のひとつとした。学習支援センターCおよびMが面接をし、一週間ほどの試用期間の後、意欲のある学生を本採用した。また雇用に至らなかった学生でも、春学期に開催したワークショップなどで訓練を積ませることで、秋学期以降の雇用を検討している者もいる。2012年度7月におけるピアサポーターの数は表9の通りである。なお、チューターの総数は15名である。

表9 ピアサポーター (PS) の人数 (2012年7月)

年次	2年次生	3年次生	4年次生	M1
PS数	2	1	3	0
研修中数	2	0	0	1

ピアサポーターが入ることによるプラスの効果は大きかったといえる。学生にとってチューターはある程度以上の年上の人間であり、「教わる」という立場になりがちである。しかしピアサポーターは、より身近な存在として気軽に声をかけることができる。また学内の事情に関しては、チューターよりもピアサポーターの方が詳しいこともある。さらに科目によっては、過去にその科目を受講したことのある学生のほうが、より適切なアドバイスを行うことができる場合もある。このような理由により、チューターとピアサポーターの二人三脚で、たがいにより影響を与え合いながら協力してゆく体制が現在の本学にとっては望ましいと考えられる。

なお現在のところ、チューターやピアサポーターとしての心得のようなトレーニングは未実施である。ただし、チューターとピアサポーターに対して研修会を、ピアサポーターに対して論理的思考を伸ばすためのワークショップを開催した。その概要を表10、11に示す。

表10 研修会概要

日時	6月16日/1日
人数	午前中 8名/午後 9名
趣旨	学習支援センターマネージャー、チューター、ピアサポーターによる、「学習支援センターの問題状況把握と課題認識の共有」「学習支援の方法や方向性の理解促進」を趣旨とする意見交換を開催。「学習に対するイメージを共有する」ためのワークショップもあわせて行った

表11 ワークショップ概要

日時	6～7月/1h30mのワークショップ×3回(日時が合わない学生用に同一内容を3回実施。合計9回行った)
人数	6～8名/1回
趣旨	「論述ワークショップ」とし、論理的思考および表現の訓練をグループワーク形式で行った

※ピアサポーター以外でも興味をもち参加した者を含む

5. 学生の利用状況

ここまで、学習支援センターの推移や運営について述べてきた。最後に、同センターの学生の利用状況を報告する。まずいたみCについて述べ、次に夙川Cの状況に移ることとする。

5.1. いたみCの状況

いたみCの学生利用状況は表12の通りである。2011年度は前述の通り週3回の開室となっている。前年度に比べ春学期は利用者数が減少したが、秋学期は増加している。その理由としては、5月までは開室が13:10からであったが、3.1で記した理由により6月頃から10:45の開室にしたことが影響していると考えられる。さらに、カリキュラムの改正により課題の質・量が変化したこともまた要因のひとつとして挙げることができる。具体的には、「フレッシュマンセミナー」が半期1単位科目でほぼ授業外学習がなかったことに対し、「キャリアデザイン」は半期2単位科目で毎回の授業外学習を課したことに大きな違いがある。

学習支援センターの利用率は、秋学期より春学期の方が高い。これは、学生は入学当初はさまざまな点が不明であるが、秋学期には大学生活にも慣れどく単純な質問は減るからだともみることができる。2011年度のみ逆転しているが、これは前述の開室時間の延長が関係していると考えられる。

表 12 いたみ C 学習支援センター利用数 (のべ人数)

年度	2008	2009	2010	2011
春学期	1,359	2,557	3,554	2,431
秋学期	961	1,594	2,292	2,770
計	2,320	4,151	5,846	5,201

※ちょっとした質問など、数分未満の利用者は含まない

なお図4は2011年度秋学期に行った初年次必修科目のアンケート結果の一部である。「授業外課題は主にどこで取り組みましたか?」の項目で半数以上が学習支援センターを挙げている。さらに「自習室やチューターについて、良かった点、改善すべき点など、自由に記述してください」という項目では、良かった点は「親切に教えてくれる」「指導がわかりやすい」が多く、改善すべき点には「私語がうるさい」などの意見があった(有効回答数 608)。

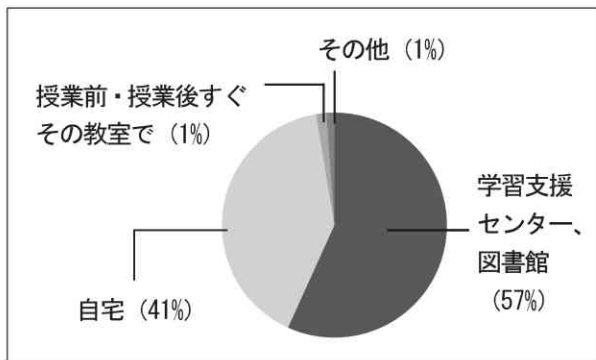


図4 「授業外課題は主にどこで取り組みましたか?」

5.2. 夙川 C の状況

2012 年度春学期夙川 C の利用学生数は現在集計中であり、本稿であつかうことはできない。その代わりに、2011 年度に試験的にチューターを配置した際、2 年次生に簡単なアンケートを実施した結果を明記する。アンケート項目は下記の通りである。

問1	チューターが CELL (夙川図書館) にいることを知っていますか?
問2	夙川キャンパスで、一度でもチューターに学習上の相談をしたことがありますか?
問3	チューターに相談するさい、どのような学習活動へのアドバイスをもらいたいですか? (複数回答可)
	1. レポート作成 2. レジюме作成 3. IT活用 4. その他

問4	チューターにしてほしい学習活動以外のサポートはなんですか?
問5	普段の学習で苦勞している事柄や課題等があれば教えてください
2011 年 9 月 27 日実施 (有効回答数 681)	

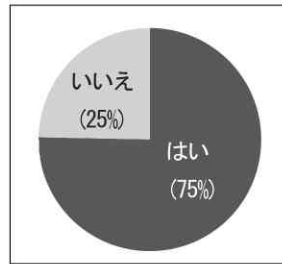


図5 問1の回答

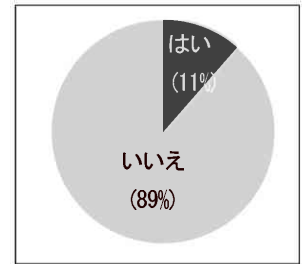


図6 問2の回答

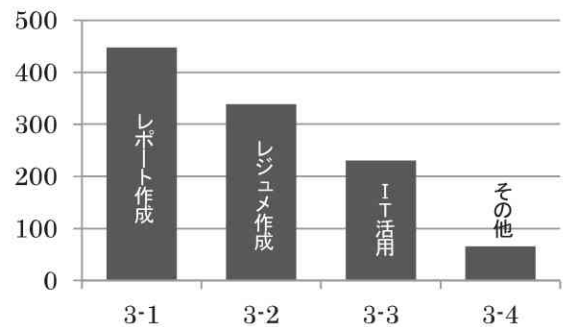


図7 問3の回答

チューターの存在は知っている(図5)ものの、その活用にはいたっていないことがわかる(図6)。問2で「学習上の相談をしたことがない」と答えた理由の主なものは、「なにを相談すればいいかわからない」「必要性を感じない」であった。問4は「進路・就活相談」が大半を占め、問5は「レポート・レジюмеの作成」が多く、問3の結果(図7)と対応している。なお次点は「パソコン関連(e-Learning含む)」であった。

このアンケート結果から、学生はチューターの存在を知っていても自分で疑問点を発見する力が弱く、またレポートの書き方について困難を感じていることがみてとれた。2012年度はこれらの点を学習支援センターの運営に反映させるよう検討した。具体的には、必修科目である CDⅢを通じて学習支援センターの存在を周知した。また、とくに CDⅢで力を入れているアカデミック・ライティングを支援する体制をとった。さらに、自ら疑問点を発見する力の育成そのものに関

与するにはいたっていないが、必修科目に限らない学習支援を行っていることをポスターなどで告知し、幅広い利用が可能であることを周知するよう努めた。チューターやピアサポーターが学生対応をする際に、学習支援センターは多様な利用ができることをうながす努力もあわせて行っている。

6. おわりに

本学の学習支援センターは、とくに初年次および 2 年次の必修科目と連携をとりながら、学生によりよい学習環境を提供するために尽力してきた。本稿はその過程の記録である。今後の課題としては、必修科目との連携は、学習支援センターの存在を学生にアピールし利用をうながす手段としてこれからも重要だろう。しかし、特定の科目以外の支援も行っていることをさらに周知徹底し、幅広い活用をうながすことが肝要であると考えられる。

またチューターやピアサポーターの育成に関しては、今年度春学期において一部開始することができた。今後はさらに育成の面にも力を入れ、よりよい学習支援が行える体制づくりに努めてゆく所存である。

平成 24 年度の中央教育審議会が審議のまとめを「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（中央教育審議会 2008b）としたように、これまでの高等教育のあり方がいま疑問視されている。大学における学びへの反省が要求され、さまざまな試みがなされるなかで、科目等の教育を柔軟にサポートする学習支援は、益々その必要性が高まってゆくと考えられる。

本学の学習支援センターはまだまだ試行錯誤の段階である。これからも切磋琢磨を重ね、自習学習への支援を通じて学生が自ら学ぶ力を育成することができる場となることをめざす所存である。

注

- 1) 2008～2010 年度の「英語表現」「情報活用」は「スタンプ制度」を導入していた。本稿の内容には関わりがないため内容は割愛する。詳細については次を参照（本田ほか 2009）。
- 2) 2008～2010 年度は、必修科目の添削・採点業務にあたる人員を「マーカ―」と称していた。しかしマーカ―が行っていたのは単純な〇×による採点などで、たとえば論述の内容に関わるような添削はしていなかった。2011 年度からは名称を「チュータ

ー」に一括し、論述内容に踏み込んだ添削指導を実施している。

- 3) 携帯電話を使用した LMS 上で、学生は「基礎演習 I、II」の振り返りを毎授業回入力していた。2009 年度のチューターは、この振り返り内容の確認と内容へのコメント入力を主業務としていた（近藤 2009）。
- 4) 2011 年度は学習支援にあたる人間を一括して「チューター」と呼んでいた。2012 年度より、本学の学生を雇用する場合は「ピアサポーター」の名称を使用することとした。なおピアサポーターの場合、名称に学部生・大学院生の区別は設けていない。

参考文献

- 中央教育審議会（2008a）学士課程の構築に向けて（答申）. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm（参照日 2012.06.14）.
- 中央教育審議会（2008b）予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm（参照日 2012.07.10）.
- コール、トレバー（2002）『ピア・サポート実践マニュアル』バーズ亀山静子、矢部文訳、川島書店、東京.
- 本田直也、奥田雅信、石毛弓（2009）学生の多様化に対応する初年次教育システムの構築と実践——全ての学生に教育の質を保証するために. 大学教育学会誌 31-2、92-95.
- 石毛弓（2010）2 年次教育が果たす役割とは何か. 大手前大学 CELL 教育論集 2、23-30.
- 近藤伸彦（2009）社会人基礎力を考慮した携帯電話対応型 e ポートフォリオ. 大手前大学 CELL 教育論集 1、5-8.
- 西山久子、山本力（2002）実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向——ピアサポート/仲間支援活動の起源から現在まで. 岡山大学教育実践総合センター紀要 2、81-93.
- 奥田雅信、近藤伸彦、野波侑里、本田直也、石毛弓（2010）大手前大学における初年次教育の取り組み（報告）. 大手前大学 CELL 教育論集 2、1-6.

SUMMARY

The Learning Support Centre at Otemae University has been open since 2008. The centre has tried various educational practices since its foundation which are widely implemented such as the way to support students' self-learning, management of the

centre, making guidelines for tutors, cooperation between the centre and existing subjects, and so on. I shall summarize those efforts in order to assess how the centre should act in the future. This is a report that shows the chronological establishment and transformation of the Learning Support Centre at Otemae University, especially in relation to the First-Year Experience which has a strong association with the centre's duties.

KEYWORDS: LEARNING SUPPORT, LEARNING SUPPORT CENTRE, TUTOR, PEER SUPPORT